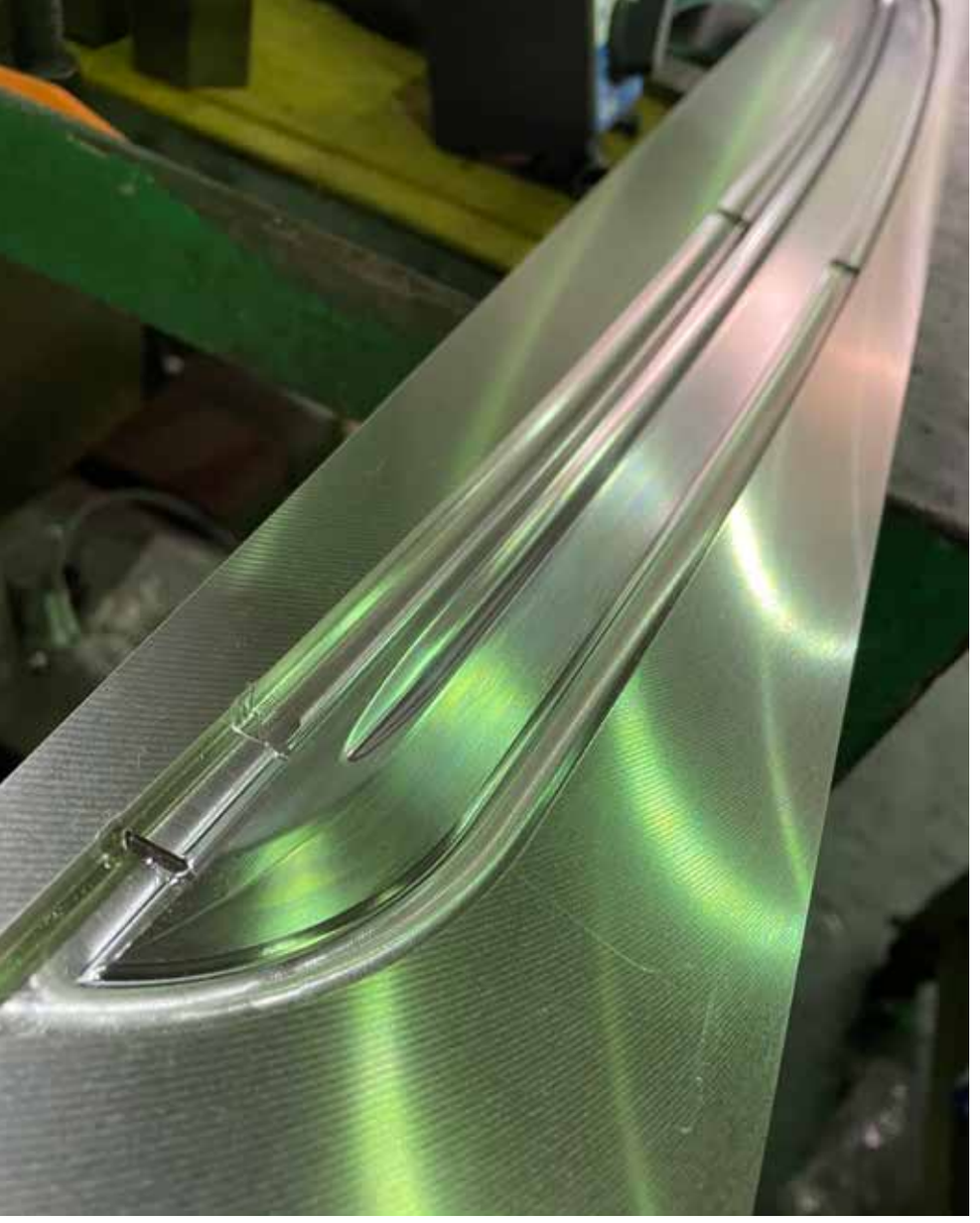
〝第三の刀〟の未来

「濃州堂」と「ショウホウテック」の二社が、〝工芸〟と〝工業〟のコラボで新たな刀を生み出す

文・写真＝月岡洋光

刀鍛冶がつくる「真剣」と居合で使われる「模擬刀」は、材料もつくり方も異なる。かたちは同じように見えても、似て非なるものだ。そこに割って入ろうとするかのように、いままでにない材料で、いままでにないつくり方がなされた〝第三の刀〟の情報を入手。取材をした。



ステンレス板を特殊な機械で刀のかたちに削り出していく。樋（ひ）や細かな紋様も入力データどおりにきれいに仕上がる（写真はショウホウテック提供）

今月号の3ページに（有）濃州堂の広告があるが、そこに掲載されている「剣道形用の刀」を愛用している剣道高段者の方々も多いことと思う。

真剣や居合刀など刀の製作・販売を手掛けている濃州堂は、岐阜県関市にある。関市（美濃）はよく知られるように、日本刀の産地として有名な五箇所のうちのひとつで、岡山（備前）、奈良（大和）、京都（山城）、鎌倉（相州）と並び、〝日本一の刃物の町〟としても知られている。

市内では現在も刀鍛冶（刀匠）が昔ながらの製法で刀をつくっているが、その数も減少の傾向にあるそうだ。濃州堂取締役社長・五十嵐啓司さんが言う。

「弊社は創業して半世紀以上が経過。私は2代目になります。私がこの世界に入ったときにはこの地に18名ぐらいの刀匠がおられましたが、いまは高齢化や後継者の問題もあって、半数ほどに……。10年20年後、さらに減ってしまう可能性を危惧しています。問題が解消されず、万が一にでも日本で刀をつくれる人がいなくなってしまったら、外国から日本刀を輸入しなければならない事態も起きるかも知れません。そうならないように、武道の世界も盛り上がっていって欲しいし、〝関市は刀をつくっていたところ〟と、絶対に過去形にしてはならないとの思いで、私たちも日々努力しています」

濃州堂でメインとして扱うのは、居合道用の模擬刀（剣道形用もほぼ同じ模擬刀）だが、やはり後継者の問題は切迫した状況にあるようだ。本物の刀と同じく、居合道や剣道形で使われる模擬刀（イミテーションの刀）でも、鞘（さや）や鍔（つば）、目貫（めぬき）、鎺（はばき）、柄（つか）、柄巻（つかまき）、下げ緒（さげお）などの刀装具（とうそうぐ）があり、それぞれ専門の職人が積み上げた

映像はこちらから！

YouTube

URL　https//bit.ly/2c8x7d9

この記事の内容を、You Tube映像でもご覧になります。
【剣道日本チャンネルkendo nippon】のアップロード動画から【第三の刀】を選択してご視聴ください。
QRコードから該当ページに進むか、上記URLをご入力ください。

“第三の刀”の未来



「上」はショウホウテックでアルミを削り出してつくった刀。アルマイトで表面をコーティングしたため少し白っぽくなっている。「中」もショウホウテックによるアルミの削り出し刀身（試作品）。樋が入っている。「下」は濃州堂にて亜鉛合金でつくった模擬刀の刀身

わざを駆使して逸品をつくり上げている。ひとつ欠ければ「刀」の完成が滞ってしまう可能性もある。高齢社会にあって後継者の育成は急務の課題だが、現実を直視しつつ、五十嵐さんはかねて願望として「機械化の導入」も頭の隅に置いてきた。

そんなとき、昨年秋頃、五十嵐さんのところにある相談が舞い込んだ。愛知県豊田市で専用機械の設計製作を手掛けるショウホウテックの社長・宇野修市さんからの刀に関する相談である。

「自社において、機械で『刀身』をつくってみた。刀に関しては素人ながら、できるだけ本物に近づけたいと思っている。ついては、ご意見やご助言をいただけないか」

といった内容だった。アルミ製のよくできた代物に、五十嵐さんも驚きを隠せなかった。

厚みや形状のことなど、専門家ならではのアドバイスを施した五十嵐さん。とくに材質について、より重さを「真剣」に似させるためには、アルミよりもステンレスの方が良いかも知れないとアイデアも出した。〝宿題〟をもらえたショウホウテックの宇野さんは、さっそく次なるテスト加工としてステンレス製の刀身を手掛けることにした。

これから先、どう話が進んでいくかは手探りの部分もあるようだが、ものづくりを手掛ける両社長はその場で意気投合。そのときから、機械による刀身づくりが〝コラボ企画〟として両者の視野に入った。

※

ショウホウテックの機械による刀身づくりとは、〝削り出し〟による加工である。〝削り出し〟とは素材の塊を切断したり削ったりしながらかたちをつくる製法で、最初の試作品もアルミの塊を切削して刀身に成形した。

居合では真剣を使うこともあるが、真剣の場合は製造の資格を得た刀匠が、砂鉄を低温処理で製作した玉鋼（和鉄）を材料に、炭素量の異なる鉄をそれぞれ折り返し鍛錬のすえ結合された鋼に〝焼き〟を入れたりして「刀」にする。居合道を習うために初めに使う切れない刀〝模擬刀〟の製造法は、多くが砂型製法である。亜鉛合金を溶かして砂素材の型に流し込んでかたちにするという鋳造法だ。

その二つが居合刀の製造法となる中で、第三の製法として現実味を帯びてきたのが、〝削り出し〟という加工法だった。〝削り出し〟についてのメリット、デメリットについては、五十嵐さんも重々承知のこと。

「砂型製法は基本の型ができたあとも、余計な部分を取ったり歪みを矯正したりしながら成形し、樋を彫ってバランスを調整し、研磨してメッキをかけます。各工程に職人のわざが欠かせませんが、それでも量産するには鋳造法の方がいい。削り出しは機械によって、狂いなくきれいに仕上がるのが最大のメリットですが、削り出すのに非常に時間がかかるところがネックです。量産できない分、単価も高くなります。また、アルミに比べても、ステンレスを加工するのはかなり難しく、手作業でやろうとすれば相当な手間がかかってしまいます。採算ベースに合わない材質ではありますが、それが機械でできるなら、考える余地もあると思います」

宇野さんが持ち帰ってきた宿題を社内のスペシャリストは見事に遂行し、状況は次のステップに移った。

広くとらえれば模擬刀にも「工芸」の要素はあろう。「機械化」というと大量生産のイメージもつきまとうが、〝第三の刀〟はまだまだその段階にない。むしろ、「工業」の力で、伝統的な「工芸」にふくらみをもたせるようなサポーター的役割を担っているようにも映る。一歩踏み出したばかりのコラボ企画。成り行きを見守りたい。

濃州堂

刀が外国でしか作れなくなったら寂しい
刀づくりの町〝関〟で後継者を育てるために



有限会社 濃州堂
代表取締役・**五十嵐啓司**さん

日本の中で刀は「刀匠がつくる刀」と「そうでない刀」の二種類しかありません。本物の真剣をつくるのは刀匠で、そちらの素材は鉄と鋼(はがね)。模擬刀の多くは我々のようなメーカーが製造しており、なおかつ、つくる素材も亜鉛合金など「非鉄合金」でなければならないことが国の法律で定められています。

弊社の模擬刀も材料はすべて亜鉛合金。独自の製法で安全性を高める硬質化を実現しています。ステンレスは、持久性という面では一番優れているような気もしますね。

居合道用も剣道形用も基本的には同じつくりですが、対人で行なう剣道形の場合は刀と刀の接触もあり、刃が欠けたり、へこんだりすることもあります。同じく真剣も欠けたり、へこんだりしますが、費用はかかるものの、刀を修理したり、刀身を取り替えたりすることはできます。剣道形用に使用する模擬刀の場合は、樋(ひ)を浅くすることで重量を少し重めにし、あらかじめ刃を引いて潰(つぶ)すような配慮もしています。

今後、材料に新味が出てくれば改善の余地もありますし、ショウホウテックさんとのコラボによって、将来、お客様に喜んでいただけるような商品ができたら嬉しいですね。

私は42歳のときに、神奈川の石堂倭文先生(居合道範士八段、杖道教士八段)にこう言われました。

「濃州堂の顧客には武道のお客さんも多いのだから、刀をつくるばかりじゃなく、自分自身も武道をした方が良いのでは？　きっと仕事のためにもなりますよ」

石堂先生から居合道と杖道を勧められ、まさに四十の手習いで両道に取り組むようになり、いまに至っています。始めて良かったです。実際にお客様の身になってものづくりができ、「こういうものを求められているのだな」というのが分かるようになりました。武道を勧めてくださった石堂先生にはいまも感謝しています。

機械による〝削り出し〟の刀身が今後どのようなものを生み出すか楽しみですし、使い手の気持ちになって何か思いついたことがあれば、ショウホウテックさんにも相談させていただきたいと思っています。

機械を活用した刀身づくりの可能性が広がるとしても、いまの仕事が全面的に機械化されるようなことは将来的にもないでしょう。職人なくして刀づくりができないのも厳然たる事実です。道具がなければ続けることができない日本の居合道や剣道を思えば、武道を普及させて道具の需要を増やし、次世代の職人さんたちに明るい未来を描いていただくのが理想です。刀の文化を守るということを前提に、機械も活用しながら、空いた時間を職人の育成にあてるという流れが、ものづくりの立場で考えるとベターのように思えます。



岐阜県関市にある有限会社濃州堂(濃州刀剣工房)は、「居合道専門店」として居合用模擬刀の製造・販売・修理のほか、真剣(新作刀・現代刀・アンティーク刀)の販売・修理も手掛ける

“第三の刀”の未来

濃州堂の社屋にある展示室には、たくさんの刀剣類が展示されている





模擬刀を研磨する



職人の感覚によって製品は寸分の狂いなく仕上がる



小刀や太刀などさまざまな種類の刀を陳列。興味は尽きない



刀匠がつくった刀に樋を入れる作業を行なう若い職人

ショウホウテック

日本の文化を支えてきたものづくりの技術
工業のサポートがその復活への一助となれば



株式会社ショウホウテック
代表取締役・**宇野修市**さん

昨年はコロナの影響もあって、一時は仕事量が五分の一まで減りました。工場の機械が稼働していないのはもったいないと思い、「せっかくだから、なにか新しいものをつくろう」と社内で声がけすると、それからは〝仕事〟が入らなくても社員も私も落ち込むことはなく、むしろ毎日を楽しんで過ごせるようになっていきました。もともと普段の仕事内容が、お客様からご注文いただいた製品を設計図どおりにつくるというもの。その製品がその後どういう風に活かされているかは、我々はリアルに目にすることができないのが現実です。自分たちの発想で生み出したものが、どんな反響を得られるかといった〝想像を伴った創造〟が、皆で楽しめた要因だったように思います。

その流れの中、新しい会社案内用のパンフレットをつくるための打ち合わせで、表紙の図案として「刀みたいなもので」という提案がありました。「じゃあ、削ってみようか」という話になったのが、すべての始まりでした(笑)。試しに実寸大で削り出してみるたところ、出来上がりを見て「非常にいいな」と。会社案内のパンフレットにも使った模造刀がそれです。

なんとなくかたちにはできましたが、刀の専門家でもないし、商品化につながるかどうかの見当もつかず、濃州堂さんにアドバイスを乞うた次第です。

〝削り出し〟だから実現できる見た目の美しさも魅力として打ち出せるとは考えていますが、まだまだ手探り状態で、市場のニーズの見極めも課題であると考えています。剣道や居合道の方々は真剣を求められておられる気もしますし、模擬刀であっても、すでに流通しているものは山のようにあります。ですから、やはり新たな市場の模索は不可欠だろう、と。

鑑賞用としての模造刀も選択肢のひとつでしょう。例えば、かつて日本で〝伝家の宝刀〟がそれぞれの家で大切にされたような、文化の再燃といいますか、一家にひと振り〝刀〟が持たれるような世界も、夢としては描けてしまいます(笑)。男の子が生まれ、五月人形と一緒に、名前の刻まれた模造刀が飾られれば、それも一生モノになると思うんです。夢だけは先行して膨らませていますよ(笑)。

我々には、ものづくりの国・日本で仕事をしている自負があり、日本の伝統的なものと関わり合えることに意義も感じています。日本人は、ものを大切にする感性をもつと言われてきました。とはいえ、大量生産で安価なものが出回ると、ものを大切にする感性が日本人の中で失われつつあると指摘されているのもまた事実です。ものづくりに携わるものとしては、ものに対して感性豊かであって欲しいと願いたいし、そういう感性が自然に持てるような商品の開発ができれば、とも思っています。



愛知県豊田市にある株式会社ショウホウテックは、各種産業用「専用機」「治工具」の設計・製作・組付・設置などを手掛けるものづくりのスペシャリスト集団

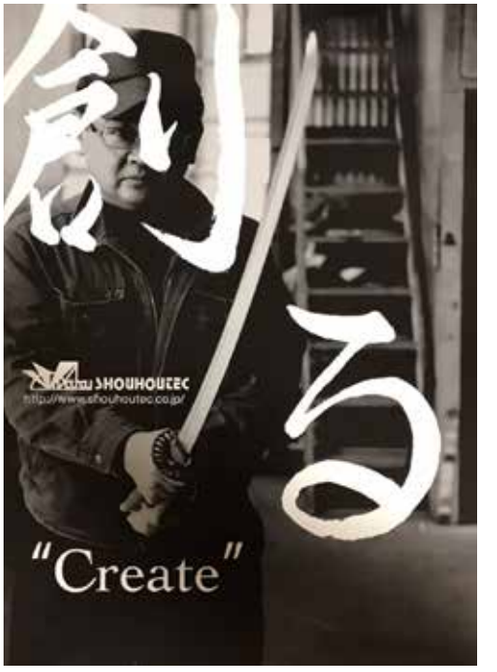
“第三の刀”の未来



上段に飾られたのはステンレス製の模造刀。
下段はアルミ製。その下に並ぶのは自社製品の「ゆらゆらコースター」（写真はショウホウテック提供）



ショウホウテックが商品化した「ゆらゆらコースター」は、以前テレビでも紹介された不安定なつくりのコースター。コースターのゆらぎで、ロックウイスキーの氷がカランコロンと音を奏でるのが特徴だ。最近、金沢の漆業者とのコラボで、漆塗りの高級ゆらゆらコースターの販売もはじめたそうだ



ショウホウテックの会社案内パンフレットの表紙。社長の宇野さんが自社で製作した「模造刀」を構える



▲刀の削り出しを行なう精密な機械。入力データどおりの形状に仕上がるように少しずつ切削する。ステンレスは、アルミの2倍近く時間を要するそうで、ひと振りの刀身を切削するには、ほぼ「丸一日」かかるという

▼ショウホウテックの工場内





初期のアルミの試作品には、龍の紋様があしらわれている。削り出しでつくられたそれは、紋様が浮き出つようにまわりが削られており「カッコイイ」と表現したくなるような新鮮さがある。将来はオリジナルの紋様を入れてもらうことも可能になるかも知れない